

2026年度

# 事業計画書

自 2026年6月 1日

至 2027年5月31日

ロボット革命・産業IoTイニシアティブ協議会

## 内容

1	はじめに	- 3 -
2	事業内容	- 4 -
2.1	事業目標	- 4 -
2.2	目標達成のために実施する事業	- 4 -
2.3	事業体制	- 4 -
3	協議会運営	- 5 -
3.1	運営幹事	- 5 -
3.2	総会	- 5 -
4	IoTによる製造ビジネス変革WG	- 6 -
4.1	国際シンポジウム開催	- 6 -
4.2	国際連携	- 6 -
4.3	ハノーバメッセ 2027 への参加	- 6 -
4.4	幹事会	- 6 -
4.5	全体会合	- 6 -
4.6	産業IoTロードマップ調査研究委員会	- 6 -
4.7	国際標準化支援AG(AG1)	- 7 -
4.8	産業トラストワーシネス・セキュリティAG(AG2)	- 7 -
4.9	中堅・中小AG(AG3)	- 8 -
4.10	エンジニアリング改革に向けた産業データ連携(AG4)	- 8 -
4.11	SIG 10 (Special Interest Group 10)	- 8 -
4.12	SIG 11 (Special Interest Group 11)	- 8 -
4.13	WG1 メルマガの発行	- 8 -
5	ロボット利活用推進WG	- 9 -
5.1	全体会合	- 9 -
5.2	WG2 ロボット実装モデル構築推進TF	- 9 -
5.3	WG2 ロボット利活用推進SWG	- 9 -
6	ロボットイノベーションWG	- 12 -
6.1	SWアーキテクチャ調査検討委員会	- 12 -
6.2	人・インフラ協調ロボット基準検討委員会	- 12 -
6.3	OSSサポート委員会	- 12 -
6.4	データ活用委員会	- 13 -
6.5	マニピュレーション委員会	- 13 -
6.6	情報発信委員会	- 13 -
6.7	先端ロボット委員会	- 13 -

6.8	小売り RX 調査研究委員会.....	- 13 -
7	未来ロボティクスエンジニア育成協議会(CHERSI) .....	- 15 -
7.1	全体会合 .....	- 15 -
7.2	CHERSI ワーキンググループ会議.....	- 15 -
7.3	海外展開の取り組み.....	- 15 -
7.4	高等専門学校での取り組み.....	- 16 -
7.5	工業高校での取り組み.....	- 16 -
7.6	高等専門学校・工業高校での取り組み .....	- 17 -
7.7	高齢・障害・求職者雇用支援機構の取り組み.....	- 17 -
8	IEC スマートマニュファクチャリングシステム委員会(SyC SM).....	- 19 -
8.1	国内委員会 .....	- 19 -
8.2	運営委員会 .....	- 19 -
8.3	工業会委員会 .....	- 19 -
9	全国ロボット・地域連携ネットワーク (RING プロジェクト) .....	- 21 -
9.1	昨年度の課題を踏まえた 今年度活動の考え方 .....	- 21 -
9.2	具体的な取り組みについて.....	- 21 -
9.3	新規会員の継続募集について.....	- 25 -
9.4	今年度の主なスケジュールについて (予定) .....	- 25 -
9.5	その他.....	- 26 -

## 1 はじめに

「ロボット新戦略」(日本経済再生本部、2015.2.10 決定)は、デジタル技術及びネットワーク技術のメリットを活かしつつ高度なセンサーや人工知能等を駆使して作業を行うシステムを、新たな「ロボット」の概念として位置づけている。本戦略は、我が国がこの広義のロボットの開発・普及を通じて喫緊の社会的課題の解決に資するとともに、ロボットイノベーション拠点として先導的な役割を果たすべく総合的に取り組むことを求めている。また、製造分野における IoT(Internet of Things)をはじめとする世界的な技術と産業の変革の潮流においても、先導的な役割を担う総合的な取り組みを求めている。

かかる期待を受け、本協議会は、関係する企業、事業者団体、学会、研究機関等が広範に参加し、政府関係省庁と連携しつつ、取り組むべき課題及び課題解決のための行動を共有し、IoT 時代に適合したロボット新戦略の推進を横断的に図ることを目的として活動を行う。

## 2 事業内容

### 2.1 事業目標

ロボット革命で目指す以下の三つの柱の実現を目指す。

①ロボット創出力の抜本強化

日本を世界のロボットイノベーションの拠点とする

②ロボットの活用・普及(ロボットショーケース化)

世界一のロボット利活用社会を目指し、日常の隅々にまでロボットの普及を図る

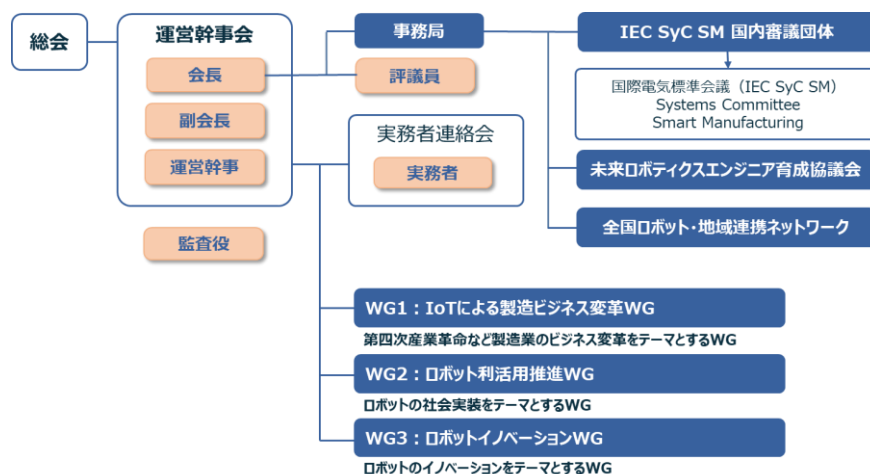
③世界を見据えたロボット革命の展開・発展

IoT時代におけるロボットで世界をリードしていくためのルールや国際標準の獲得を図る

### 2.2 目標達成のために実施する事業

- ① ロボットイノベーション及びロボット利活用推進に関する課題解決に資する関係者のマッチング、ベストプラクティスの共有・普及の推進
- ② 国際標準化活動の推進に向けた情報共有、共有課題の整理及び対応策の企画・立案
- ③ 情報セキュリティ確保策の企画・立案
- ④ 国際プロジェクト等の企画・立案
- ⑤ 実証試験のための環境整備
- ⑥ 人材育成のための企画・立案
- ⑦ 関係機関との連携による研究開発、規制改革等の推進
- ⑧ 国際連携を含めた関連情報の収集・発信、普及・啓発事業の推進
- ⑨ その他本協議会の目的を達成するために必要な事業

### 2.3 事業体制



### 3 協議会運営

#### 3.1 運営幹事

協議会規約に基づき以下のとおり開催し、重要事項について審議・決定いただく。  
なお、書面審議においては事前に実務者連絡会議を開催し、各議案の詳細説明と質疑を行う。

- 第 32 回運営幹事会(書面審議:2026 年 6 月 1 日～6 月 12 日)  
第 1 号議案: 2025 年度事業報告書案および 2026 年度事業計画書案  
第 2 号議案: 2025 年度決算報告書案  
第 3 号議案: 2026 年度予算修正案
- 第 33 回運営幹事会(2026 年 6 月 19 日 オンライン)  
第 1 号議案:会長・副会長の選任

#### 3.2 総会

協議会規約に基づき総会を実施すると共に、総会報告会を開催し、RRI の活動状況と決定事項について会員内の共有を行う。

- 第 13 回総会(書面審議:2026 年 6 月 1 日～6 月 12 日)  
第 1 号議案:任期満了および会員代表者の変更に伴う運営幹事の選任  
第 2 号議案:任期満了に伴う監査役の選任
- 総会報告会(2026 年 6 月 19 日 オンライン)  
第 32 回運営幹事会の書面審議結果報告  
議事録報告  
2025 年度事業報告と 2026 年度事業計画について  
2025 年度決算と 2026 年度予算について  
第 13 回総会の書面審議結果報告  
議事録報告  
2026 年度 RRI 運営体制(運営幹事、監査役)について

## 4 IoT による製造ビジネス変革 WG

2025 年度に続き、本年度も製造 IoT によるビジネス変革に資する諸活動・協調領域議論の場を提供していく。産業構造や製造ビジネスの変革は RRI 単体で実現できるものではないため、外部のステークホルダとの連携を強化し、関係者がアクションを起こしていく上で参照するシナリオやエビデンスを提供していくことを意識する。本年度は従来の活動に加え、Industrial AI の活用に向けた準備委員会の動きも開始する。

### 4.1 国際シンポジウム開催

日本が製造業の未来に関する情報の集積地・発信地となることを目指し、2026 年 11 月に 12 回目となる国際シンポジウムを開催する。国外の登壇者として独米より講演者の招聘を検討する。なお、国際シンポジウム開催にあたっては例年より会員企業にスポンサーとして支援いただいている。今年もより多くの支援をいただけるよう内容の充実に取り組む。

### 4.2 国際連携

中長期的なテーマを国際社会に対して発信していく。AI の進化に伴う設計・製造プロセスの変化、人と機械の関係の変化やそのインパクト、製造エコシステムの構造など製造の在り方がどのように変わっていくのか、米独日による議論を日本からリードしていく。進捗や成果は国際シンポジウムやハノーバメッセなどで公開していく。

### 4.3 ハノーバメッセ 2027 への参加

- 産業トラストワーシネス・セキュリティ、国際標準化、製造データスペースなど、日独連携の成果発表
- ODS をはじめとする日本からグローバルに向けたプロモーションの実施
- 日独連携に関する専門家会合および独キーマンとの会合実施
- 製造データスペースの国際体制組織化に向けた各種会合への参加
- 産業領域における各種動向の調査の実施

### 4.4 幹事会

引き続きグループ間の情報共有強化・課題共有を促進し効率的な組織運営、WG1 活動の方針づけ・運営を行っていく。

### 4.5 全体会合

活動方針・予算・決算の承認に加え、活動状況の共有、外部動向の理解(特別講演)を進め、会員企業・団体の更なる参画を実現していく。

### 4.6 産業 IoT ロードマップ調査研究委員会

単なるテクノロジーの議論に留まらず、社会課題に向けた「製造業のあるべき姿」およびアプローチを見出すべく 2018 年度より活動を行っており、本委員会は WG1

の中長期的な方向性を見出すものとして位置づけられている。また、先の読めない時代において、未来を設計するスキル獲得に向けたワークショップを開催する。

#### 1)本委員会

2018年度から行った現状認識、システムズエンジニアリングの考え方習得、将来像の描き出しを踏まえ、WG1の各AG活動への展開を図っていく。また、「VUCA時代に求められる未来を設計するための準備ワークショップ」を昨年度に引き続き実施する。

#### 2) 4th IR アカデミー

第四次産業革命に関連する動きについて会員相互の学びの場として、多方面から講師を招き4th IR アカデミー (Webinar)を継続する。

#### 3) 研究・イノベーション学会との連携

同学会リードのもと、以下の共同研究チームに参画し、産業界・アカデミア連携でのイノベーション創出に関する検討を継続する。

- ・イノベーション&連携検討研究会
- ・デジタル基盤研究会

#### 4)ビジネスエコシステムに関する日独連携

昨年度に再開した日独間でのビジネスエコシステム、プラットフォーム経済の検討を継続する。ビジネスモデルの変革や中小企業を巻き込んだエコシステムの作り方は日独で異なり、双方の差異を認識しつつ共通点を見いだしていく。

### 4.7 国際標準化支援 AG(AG1)

本AGは、国内のスマートマニュファクチャリング標準化団体・専門家が集い、情報共有・標準化戦略を議論・検討する場である。

#### 1)本委員会

基盤活動として情報共有を継続していく。また、新たに以下のタスクを加え、戦略的な動きを強化していく。

#### 2)日本型標準加速化モデルの考察TF

国際標準化の現場と国内活動・政策間の認識のズレを整理し、加速化モデルの考察とメタ認知分析を通じてAG1の次期活動テーマの抽出を行っていく。

#### 3)日独標準化専門家会合

日独にてスマートマニュファクチャリングに関する将来の標準化領域について議論、検討を深める。

### 4.8 産業トラストワーシネス・セキュリティ AG(AG2)

PI4.0 WG3と連携し、Trustworthiness Conceptに関する協議を推進する。特に、DPP(デジタル製品パスポート)やESPR(エコデザイン規則)によって求められる製品関連データの信頼性要件への対応を視野に入れつつ、製造業におけるデータ

の信頼性確保に向けた国際的な枠組みづくりに貢献し、評価項目とその評価方法の整理・明確化を目指す。このため、日独セキュリティ専門家会合を定期的で開催し、両国の知見をもとに議論を深める。成果は 2027 年ハノーバメッセなどの機会でも共同ホワイトペーパーとして発表し、国際規格への提言やグローバルな議論への影響力強化につなげる。

#### 4.9 中堅・中小 AG(AG3)

中小製造業のデジタル化事例を題材とした相互研鑽活動を行うコミュニティの育成に努める。中小企業のスピード感を重視しながら、これまでの主要プレイヤーに新たなメンバーも加え、意見交換を実施した。業務レイヤーとシステムレイヤーの両面から、現場での課題解決アプローチや企業間連携のあり方を整理し、中小企業の DX 推進に向けた実践知を Web ページにて公開していく。

#### 4.10 エンジニアリング改革に向けた産業データ連携(AG4)

日本における製造データスペースの在り方について、国内関係各所との連携を行い、ステークホルダーが参照するシナリオとエビデンスのとりまとめを行っていく。デジタルエコシステム官民協議会への参画など、国内の諸活動へ参加していく。

国際連携に関しては以下の 2 点を中心に活動していく。

- 日独専門家会合において、製造データスペースに参加する企業の準備度(Readiness)をテーマに日独双方の事例を共有し、モデルとなるケースを見出していく。
- RRI が国際組織 International Manufacturing-X Council(IMX)への日本側窓口として国内関係者との情報共有や対応方針のとりまとめを行っていく。

#### 4.11 SIG 10 (Special Interest Group 10)

DX 実現を継続的な活動として定着させるため、現場視点で、DX 実現のための諸課題を洗い出し、多角的に議論する活動コミュニティを 2023 年度に開設している。昨年度までの検討を踏まえ、視点・考え方の整理を行う。再現性のあるアプローチ方法としてアウトプットしていく。

#### 4.12 SIG 11 (Special Interest Group 11)

日本的生産方式に適合したモデルの創出。定型データと非定型データの横のすり合わせデータをユースケースとして提示し、抽象化したレベルでデータモデル化を検証する。

#### 4.13 WG1 メルマガの発行

WG1 メルマガについては、継続して情報発信を行っていく。会員による寄稿も増やし双方向でのコミュニケーション媒体を指向する。

## 5 ロボット利活用推進 WG

株式会社安川電機岡久学氏が主査。ロボット実装モデル構築推進 TF(タスクフォース)とロボット利活用推進 SWG(サブワーキング)からなる。

### 5.1 全体会合

ロボット実装モデル構築推進 TF、ロボット利活用推進 SWG それぞれ、各活動のリーダーより活動状況を定期的に報告してレビューを実施する。

### 5.2 WG2 ロボット実装モデル構築推進 TF

分野ごとにユーザ、SIer、ロボットメーカーのチームでサービスロボットの普及を目指す社会実装型のプロジェクトで、年度ごとに活動を見直しながら進めている。ロボット導入容易な環境を構築するというロボットフレンドリー(ロボフレ)コンセプトに基づく規格・標準化の検討等を実施することを通じて、ロボット実装モデル構築を目指す。2026 年度も、食品、物流倉庫の 2 分野で TF 活動を推進する。

#### 1)食品 TC

(一社)日本惣菜協会 荻野武氏が TC 長。全産業の中でも労働生産性が低いと言われる惣菜関連製造の機械化を目指して、日本惣菜協会に所属する企業の協調領域でのニーズを反映して、「最高のロボットシステム開発」と「ロボット化の全体最適化他」を推進しているところ。

2026 年度は、昨年度に引き続き、導入コストが高い、多種多様な具材対応が難しい、技術的な知識や人材がおらず、導入後の運用コストが高いことやトラブルへの不安があることなどの現場導入ニーズの解決を進めていく。また、食品 TC 会議の場としては、メンバによる課題や進捗共有、将来技術に関する情報交換なども推進する。

#### 2)物流倉庫 TC

株式会社フレームワークス 秋葉淳一氏が TC 長。ロボフレ環境実現のために、マテハン・ロボット・上位システム I/F 標準化、ケース荷姿の自動化観点規格化、人協働ロボットを活用したピースピッキング(パーソナルロボット・人協働ロボットにかかる技術動向調査・ユースケース検討・環境整備)、及びカゴ車の標準化(物流施設の自動化に資するロールボックスパレットのモデルケース創出)について検討してきた。

2026 年度は、昨年度物流倉庫 TC から独立したケース強度評価 SWG を引き続きサポートすると同時に、物流倉庫におけるロボット利活用について、生成 AI やフィジカル AI なども含めて改めて業界協調領域の議論再開を検討していきたい。

### 5.3 WG2 ロボット利活用推進 SWG

分野ごとあるいはテーマに応じたロボットに関する標準化やロボットの更なる普及

促進に関する検討を(一社)日本ロボット工業会(JARA)と連携して推進する。

なお今年度、介護分野 SWG は休止し、建設分野 SWG は活動終了となる。

#### 1) ケース強度評価

ロジスティード株式会社 渡辺隆史氏がリーダー。2026年度は、2025年度に実施した天面引張強度試験、ロボット荷役試験の結果を踏まえたケース強度評価手法に関する最終報告をまとめて、その内容を11月の全体会で共有して、活動終了予定。

#### 2) ニーズ/シーズ課題整理

立命館大学 川村貞夫氏がリーダー。2025年度に引き続き、産学連携のための情報共有の活動を継続する。2026年度は、造船、重工業、物流、海洋、農林水産業、縫製の分野に注目して活動する予定。

#### 3) AI 利活用安全性検討

産業技術総合研究所 中坊嘉宏氏がリーダー。AIロボティクスのセーフティに関する今後の課題と方向性を踏まえて、検討スコープの拡大や優先順位を議論して、評価実証と評価観点ガイドのアップデートを進める。また引き続き、コンテンツやイベント展示等を通じて、普及啓発活動を進め、当SWGの拡大・機能強化を目指す。今年度は、新規ユースケースとして、産業用協働ロボット(モバイルマニピュレータ等)におけるAI活用と安全確保法に対する実証実験について検討を進める。また評価手法として新たにAIロボティクスにおけるセキュリティ分析について検討を進める。

#### 4) 物流倉庫マテハン設備IF標準化

アマゾンジャパン合同会社 武藤剛和氏がリーダー。物流業界においても設備の自動化が更に加速していくが、現在メーカーごと、設備ごとに使用される規格やI/Fが異なる場面が多く、非効率な開発(工数、リードタイム等)、データ活用の難しさ、海外への展開の障壁などの問題につながっている。そこで、設備間や上位通信の規格・I/Fを標準化することにより、開発の効率化とデータ運用の最適化を図ることとした。2025年度に新規発足し2年目。2つのユースケースを想定した分科会体制を継続し、それぞれについてI/F標準化案を策定し、仕様書にまとめる。その後、策定した仕様が実際に現場実装可能か実証実験を現場で行い、最終報告をまとめる予定。

#### 5) プラットフォーム実装

産業技術総合研究所 安藤慶昭氏がリーダー。2025年度から開始されたNEDO「ポスト5G情報通信システム基盤強化研究開発事業(ロボティクスソフトウェア開発PF)」においては、OSSを活用したロボットシステム構築のためのアーキテクチャ確立が求められており、デバイス(カメラ、ハンド、ロボット(アーム、移動)など)の共通インターフェイスや、移動機能、マニピュレーション機能等のサブシステム

レベルのアーキテクチャの共通化が必要と考えている。本 SWG では、デバイスインターフェースの共通化・標準化を通じて、ロボット Sler がこれらのデバイスをより利用しやすくする環境を整備していくことを目指す。今年度は、引き続きカメラ共通インターフェースについて議論を継続し、カメラ共通インターフェース仕様書を完成させるとともに、エンドエフェクタ I/F の議論を再開する予定。

#### 6) フィジカル AI 政策支援

清水建設 五十嵐俊介氏がリーダー。今年度も引き続き COCN 内にてフィジカル AI に関する活動を継続することとなったため、RRI との連携も継続する。今年度はこれまでの政策提言を踏まえ、政府と連携し社会実装に向けて実効性のある取り組みを進め、政策の実現を図るために、政策提言で提言した産業共通基盤の整備や実証環境・エコシステムの実現、政策連携・プロジェクト化などについて具体的な検討を進める予定。

## 6 ロボットイノベーション WG

主査:佐藤知正氏(東京大学名誉教授)、副主査:谷川民生氏(産総研)。ソフトウェアアーキテクチャ調査検討委員会は、これまで通り、安全、マニピュレータ、運用管理の 3 つの分野で、内容を更新しながらソフトウェア仕様の標準化活動を継続する。人・インフラ協調ロボット基準調査検討委員会では、昨年引き続き、ロボットとインフラとの協調の部分に関して ISO への提案活動を継続する。OSS サポート委員会は、これまで通り、ROS を中心としたロボット関連 OSS の最新動向共有の活動を継続する。データ活用委員会は、生成 AI を活用したロボフレ事例の紹介と、最新の生成 AI 技術の紹介の活動を継続する。マニピュレーション委員会では、Physical AI を含めた議論を継続する。情報発信委員会では Physical AI を中心とした新技術に関する情報発信を継続する。更に今年度からは、先端ロボット委員会と小売り RX 調査研究委員会を立ち上げ、ロボットイノベーションの加速に貢献していく。

### 6.1 SW アーキテクチャ調査検討委員会

名城大学・大原賢一氏が委員長。産総研・安藤慶昭氏が副委員長。前年と同様に、3 つの小 WG 体制での活動を継続する。

#### 1)運用管理小 WG リーダ:大原賢一氏(名城大学)

今年度は、これまでの仕様で明確にできていなかった移動ロボット群の運用・管理につながる地図管理について、既存の取り組み例の整理とアーキテクチャの議論を行う。

#### 2)安全 SA 小 WG リーダ:三好崇生氏(サイバネット MBSE 株式会社)

昨年度末から AISI と共同で推進開始した AI を使ったロボットの安全ガイドライン作成を継続する。モバイルマニピュレータを例として具体的な検討を行い、方向性を示す。

#### 3)マニピュレータ小 WG リーダ:長谷川浩氏(セイコーエプソン株式会社)

昨年度に整理した「自律ロボットの自律動作のための情報をどのようにやりとりするか」に関する具体的なインターフェイス仕様をまとめる。

### 6.2 人・インフラ協調ロボット基準検討委員会

JARA・鍋嶋厚太氏が委員長。産総研・中坊嘉宏氏と JARA・岡本球夫氏が副委員長。昨年度に続いて、①人共存環境での移動性評価(これまでの ISO/TC299/WG4 対応)、②ロボットサービスインフラ(昨年度から開始した ISO/TC299/WG15 対応)、③ロボットシステムの性能・導入効果の指標化(昨年度から開始した、ロボットと建物設備が複合化したサービスロボットシステムの性能指標と評価方法の検討)を継続する。

### 6.3 OSS サポート委員会

産総研・安藤慶昭氏が委員長。東京大学・岡田慧氏が副委員長。ROS の活用事

例や ROS コミュニティ動向の情報共有を行うとともに、会員の活動紹介、ROS 等の OSS に関する困りごとの対応を継続する。

#### 6.4 データ活用委員会

東京大学・佐藤知正名誉教授が委員長。産総研・谷川民生氏が副委員長。生成 AI を活用したあらゆる分野のロボフレの成功事例を集めた講演及び、エージェント AI に代表される最新の生成 AI 技術の紹介を継続する。

#### 6.5 マニピュレーション委員会

大阪大学・原田研介氏が委員長。産総研・堂前幸康氏が副委員長。今年度は、堂前副委員長を中心としたワーキンググループを作り、各産業セグメントに Physical AI に関するどのようなデータがあり、それらがどの程度価値がありそうかに関する議論を行う。併せて、昨年度に続いて国内外から Physical AI の著名人に来ていただいてご講演いただく。結果はエージェント AI を使ってほぼ自動で文書に纏め、これらを生成 AI を使って検索できるシステムの構築を目指す。

#### 6.6 情報発信委員会

産総研・谷川民生氏が委員長。都立大学・和田一義氏が副委員長。昨年までは、ロボットの世界の 2 大国際会議である ICRA (International Conference on Robotics and Automation) と IROS (International conference on intelligent Robotics and Systems) の定点観測を行ってきた。この活動は継続するが、ICRA、IROS に限定せず、Physical AI を中心とした昨今の重要なトレンドに注目し、これを発信する活動として継続する。

#### 6.7 先端ロボット委員会

JARA・鍋嶋厚太氏が委員長。産総研・中坊嘉宏氏が副委員長。今年度から新設された委員会である。国内外でヒューマノイド等の先端的なロボティクス技術の研究開発・実用化が活発に試みられている。しかし、これらは全く新しい分野であり、定まった基準・市場・ステークホルダを持たない。一方で、外来的/内発的な事由によって、先端ロボットに対する政策、標準化、環境整備、国際連携の提言が必要なケースが増加傾向にある。このようなケースが生じた際に、一旦これらを受け止め、関連する知見者や団体に検討を依頼するためのハブとなる委員会として活動を開始する。

#### 6.8 小売り RX 調査研究委員会

東京都立大学・和田一義氏が委員長。今年度から新設された委員会である。昨年までは、WRS のコンビニチャレンジが行われており、この場でコンビニへのロボット導入の議論が行われてきたが、WRS は昨年度で終了し、議論の場が無くなった。一方でコンビニ業界においても人手不足は深刻さを増しているが、ロボットに精通し

た人材はまだまだ少ない状況にある。そこで、コンビニ各社、ロボット企業、大学等が産官学でロボットの社会実装加速のための活動を開始する。最終的には建設分野の建設 RX コンソーシアムのように、業界で自らこの分野を牽引する形を目指す。その状態に向けて軌道に乗せるための活動を本委員会を実施する。

## 7 未来ロボティクスエンジニア育成協議会(CHERSI)

自動化に必要な不可欠となっているロボット技術者やロボットを使いこなす人材、いわゆるロボット利活用人材を日本全体で育成することが急務と判断し、CHERSI を 2020 年 6 月に設立して、継続して活動を行っている。

### 7.1 全体会合

委員長:ファナック株式会社 篠塚 一光氏

- 第 19 回委員会(2026 年 4 月):2025 年度活動報告、2026 年度活動計画について
- 第 20 回委員会(2026 年 10 月):2026 年度上期活動報告、下期活動計画について
- 第 21 回委員会(2027 年 2 月):2026 年度活動報告、2027 年度活動計画案について

### 7.2 CHERSI ワーキンググループ会議

委員長:ファナック株式会社 篠塚 一光氏

メンバーは、幹事(国立高等専門学校機構、ファナック、デンソーウェーブ、日本ロボットシステムインテグレータ協会)、および三菱電機、安川電機、不二越、高齢・障害・求職者雇用支援機構である。議題は 2023 年度に「ロボット社会実装教育推進協議会」でまとめた内容を受けて、CHERSI で今後行っていく活動について議論し、現在行っている活動の進捗状況の報告などを毎月行う。

### 7.3 海外展開の取り組み

タイには多くの日本企業が進出しており、自動車や電機などの産業において製造ラインの自動化が進められているが、都度日本から Sier 企業のエンジニアが現地へ赴く必要があり、フレキシブルな自動化対応ができる状況になっていない。また、今後は人材不足や Thailand4.0 による政府の後押し等を背景に地元タイ企業が積極的にロボットの導入を検討することが見込まれ、システム構築できるタイの SI 企業やエンジニアを早急に育てる必要がある。

上記理由より、AOTS、および Sier 協会と協業して、タイの人材育成のためにエンジニアの教育と Sier 検定制度の仕組みの導入を計画した。CHERSI は、タイ人の Sier と Sier 検定員への教育をタイに進出している日系ロボットメーカ(ファナック、三菱電機、安川電機、不二越)と協業して実施する。本件は、AOTS の事業環境整備事業として 3 年間かけて実施し、昨年度終了する予定であったが、タイ側からの継続要望と各社の協力体制が高く評価されたことにより、さらに 1 年間延長することになり、本年が最終年となる。本事業終了後も継続した活動が続くように日系現地メーカと協力し、TGI(タイ政府教育機関)では新たにロボットの応用コースを設け、TARA(タイの Sier 協会)にはエンジニア向け教育制度を立ち上げる活動を行い、タ

イ人エンジニアを育てる。

#### 7.4 高等専門学校での取り組み

##### 1)産学官協議会(教員向け)

主として産業界、教育機関の取り組みに関する意見交換、最新技術の動向、工場見学などを実施する。昨年度と同様に1回の実施を計画する。開催方法については、リモート、もしくはハイブリッドでの開催を予定している。

##### 2)シミュレータソフト教育(教員向け)

教員向けにロボットの実機を使った講習会とロボットシミュレータソフトの講習会を実施し、高専の先生にロボットシミュレータを使った授業を取り入れていただく。今年度は、川崎重工、三菱電機、デンソーウェーブの3社で実施する。

##### 3)サイバーフィジカルシステム(CPS)教育の導入

グローバルな技術競争の加速により、中国をはじめ海外 SIer の技術力・コスト競争力が高まり、日本の産業基盤は大きな脅威に直面している。これに対して、デジタル・ものづくり領域の人材を「量と質」の両面で強化するために CPS 教育の導入について、昨年度より検討を実施し、今年度より試験的に導入を行うことを決めた。知識偏重ではなく、シミュレーションで作成したプログラムを実機で動かす実践学習を中核に据え、短期間で実装力を獲得できる最短ルートを提供することで、即戦力化と学習意欲の向上を同時に実現する。

- CPS 教育立上げ PT

下記メンバーで1回/月程度の打合せをおこない、導入の検討を行う。

委員長:ファナック 篠塚主査

副委員長:北九州高専 久池井先生、三菱電機 小山氏、SIer 協会 柳原  
副会長

メンバー:川崎重工 牧田氏、合田氏、ファナック 青木氏、不二越 北條  
氏、安川電機 川村氏、和田氏、SIer 協会 久保田会長、高本  
氏、豊電子工業 成瀬氏、三明機工 樽松氏、北九州高専 富永  
先生、函館高専 中村先生、福井高専 亀山先生、大分高専 中  
野先生

活動目的:CPS 教育の導入と今後の進め方

活動期間:2025年12月~2027年3月

- 2026年度対象校

下記4校でCPS教育の導入、教育プログラムの開発を検討する。

北九州高専、函館高専、福井高専、大分高専

#### 7.5 工業高校での取り組み

##### 1)夏季講習会(教員向け)

全国工業高等学校長協会主催の教員向け講習会。

今年度も7月、8月に3社(川崎重工株式会社、株式会社安川電機、三菱電機株式会社)で実施予定。募集人員は26名で、対象は教員となる。

## 7.6 高等専門学校・工業高校の取り組み

### 1)工場見学・出前授業(学生、生徒向け授業)

学生に最新技術の提供や企業の活動状況などの情報提供をおこない、今後の進路の参考にしていただく。2025年度は、35校、1,598名に参加していただいた。今年度50回、計3,000名の参加を計画する。

### 2)修学旅行の取り組み

各地の学生が、これまで見学することのできなかつた遠方のロボットメーカーの工場見学ができる機会の提供を行う。また、最新技術動向、仕事の内容など学生が興味を引く内容についても、この機会に情報提供する。

### 3)動画製作の取り組み

高専・工業高校・ポリテクカレッジの学生向けにロボットへの興味・関心を持ってもらうことを目的として、2025年度に好評を得た「北九州高専の授業」および「YouTube 動画」の作成に関して、2026年度も下記2案について製作を検討する。

#### ① 北九州高専向け授業

対象:主に高専の学生向け

方法:北九州高専の授業:90分間/社(掲載:高専サイト)

時期:26年上期(4月8日～8月12日 10:45～12:15)

目的:ロボット技術、産業構造、導入事例、関連職種などについて、学生に体系的な学習機会を提供する

内容:基礎知識から実際の活用事例、業界理解、仕事理解など

#### ② オンライン講演会

対象:主に高専・工業高校・ポリテクカレッジの学生向けであるが、一般学生も対象とする。

方法:オンライン:20分程度/社(掲載:YouTube)

時期:26年夏休み or 下期を予定

目的:学生が興味を持つテーマを通じて、ロボット分野の魅力や将来性を伝え、興味・関心を喚起する。

内容:特定のテーマに絞り、学生が興味を持つ内容を短時間で伝える

## 7.7 高齢・障害・求職者雇用支援機構の取り組み

### 1)ロボット分野の在職者訓練コース

ポリテクセンターの17施設(高度、北海道、宮城、関東、中部、新潟、石川、福

島、静岡、山梨、広島、福岡、熊本)、ポリテクカレッジ(東北、滋賀、北陸、浜松)においてロボット分野の在職者訓練を38コース実施する予定である。

内容は、ロボットシステム設計技術に関する8分野と協働ロボットに関する3分野となっている。Sler協会のヒューマテックジャパンに協力していただく。

## 2)職業能力開発大学生向け勉強会

全国25校の職業能力開発大学校の学生に最新技術の提供や企業の活動状況などの情報提供を行い、今後の進路の参考にしていただく。これまで、高専、工業高校を中心に実施していた出前授業を職業能力開発大学校へも拡大する。

## 3)総合経済対策に盛り込むべき重点施策に係る取組

政府の日本成長戦略会議における「総合経済対策に盛り込むべき重点施策」に関連し、厚生労働省から人材開発の観点から取り組める分野とその具体的な取組を検討するようJEEDが指示を受けている。これまでCHERSIでは、JEEDと協力してロボット利活用人材の育成のためのポリテクカレッジ学生を対象とした勉強会や在職者を対象とした職業訓練の実施に取り組んできた。

当該活動を重点施策の「AI・半導体」分野の取組(案)として、JEEDが厚生労働省に提出した案について、CHERSIとしても協力していく。

## 8 IEC スマートマニュファクチャリングシステム委員会(SyC SM)

RRI は IEC(電気・電子技術分野の国際標準化活動機関)内に設置されている、スマートマニュファクチャリングに関する活動を行う SyC SM(System Committee Smart Manufacturing)の国内審議団体の事務局を担当している。今年度は、以下のワーキンググループとアドホックグループ(ahG:新規に活動を開始する前に構成される暫定の活動組織)に積極的に関わっていく予定である。

- **ahG8:Data spaces for Smart Manufacturing**  
(データスペースに関する活動)
- **ahG9:Key Performance Aspects for Smart Manufacturing**  
(スマートマニュファクチャリングの評価指標に関する活動)

WG 8 はその前身である ahG 8 の検討結果を受けて、2025 年 7 月に設立されたワーキンググループである。ahG 9 は 2023 年 11 月の IEC 国際会議にて新設が提案され、活動を継続しているアドホックグループである。これらのアドホックグループに対して日本の製造業におけるニーズを入れ込んだ提案活動を事務局はサポートしつつ、SyC SM の国内審議団体を構成する 3 つの委員会(国内委員会、運営委員会、工業会委員会)を運営していく。

### 8.1 国内委員会

関連する国内審議団体、工業会、企業、学識経験者等を中心とした委員会であり、運営委員会からの原案提案に対する最高決定機関である。国内委員会は各委員会の活動報告を共有し、活動の方向を決定する。また、国内委員会は SyC SM のワーキンググループや、アドホックグループ等の設置に対応して、それらに対応する専門委員会と呼ばれるそのミラー組織を設置または解散することができる。現在までに WG 8、ahG 9 に対応する各専門委員会が組織され、これらの専門委員会で国際標準化への対応を検討している。そしてこれら専門委員会の検討結果をもとに、2026 年 11 月にドイツで開催される IEC の国際会議に委員を派遣し、各国との交渉を行っていくとともに、その討議の結果を受けて国内でさらに議論を進めていく予定である。

### 8.2 運営委員会

運営委員会は、SM 関連の標準調整に強く関与する意思のある企業や学識経験者を中心とした委員会である。SyC SM の企画や運営、委員募集活動等を行う。今年度は昨年度同様に計測展の講演の企画などを通じて SyC SM の委員増に向けた活動を行う予定の他、上記 WG と ahG に対して日本からの提案を入れ込むための方針を国内委員会に提案することを検討している。

### 8.3 工業会委員会

工業会委員会は、SM に関係の深い工業会により構成される。今年度は、昨年度

と同様に SM の自らのビジネスへの影響を検討するために、SM に関連する製造業界での取り組み等を紹介する工業会横断セミナーを開催することを検討している。また今年度は、昨年度策定した工業製品の Circular Economy に関する国際標準化要件の調査仕様を活用することを検討している。これらの検討は、工業会に対してより貢献する取り組みは何かを重視し、各委員の意見を聞きながら実施していく。

## 9 全国ロボット・地域連携ネットワーク(RING プロジェクト)

人口減少等の社会課題が一層深刻化する中、持続可能な地域社会を構築していくためには、地域において活躍する中小企業でも活用できるようなロボットを導入しやすい環境を整備し、企業の生産性の向上を図ることが重要である。この地域企業の生産性向上を推進するには、地域における専門人材(コーディネータ)における丁寧な伴走支援の取り組みが重要であり、今後、地域の支援体制(地域プラットフォーム)の取り組みを、国を挙げてサポートする体制を整備し、効果的な支援手法の確立や全国の支援ノウハウの共有を図り、ALL JAPAN で地域の支援力の向上を目指す。この地域の支援体制の取り組みの事務局を引き続き RRI にて担当する。

### 9.1 昨年度の課題を踏まえた 今年度活動の考え方

RING プロジェクトでは、地域(自治体、支援機関等)の支援力/自走力を高める事で、これまで手が届かなかった地域の中小企業に至るまでの自動化/ロボット導入を加速し、人手不足に悩む地域経済の持続的発展と日本のロボット業界の競争力強化に貢献する事を目的としている。

これを実現するため、昨年度は地域課題への取り組みとして、4つのワーキング活動(①地域支援モデル創出 WG ②自動化コーディネータ育成 WG ③事例及びコーディネータDB構築 WG ④セミナー・ワークショップ WG)を立上げ、計画的かつ組織的な取り組みを推進してきた。

今年度は昨年度推進してきた地域課題への取り組み(4WGによる活動)を更に進展させるべく、地域30会員(自治体、支援機関、地域企業)のみならず、様々な領域で強みを持つ関連企業にも幅広く参加を募り、企業会員40社も加えた新たな連携や解決策の提案が推進できる新規ワーキング活動(昨年度からの継続・強化、新規取り組み)を新たに始動する。

着実かつ発展的に活動を推進していくため、昨年度の「4つのワーキング活動」を以下のように再編成し、地域(自治体、支援機関、地域企業)、企業、専門機関が密に連携しながら取り組んでいく。

- <新 WG1> 地域支援モデル創出 WG:継続・強化
- <新 WG2> ロボット導入支援人材育成 WG:継続・強化
- <新 WG3> 企業&地域連携促進 WG:新規取り組み
- <新 WG4> ロボット導入支援の高度化 WG:新規取り組み
- <新 WG5> ロボット利活用の掘り起し普及促進 WG:継続・強化

### 9.2 具体的な取り組みについて

#### 1)地域支援モデル創出ワーキング活動(新 WG1)

##### 【リーダー】

一般社団法人 機械振興協会 技術研究所

### 【取組み趣旨】

昨年度に引き続き、地域支援力の向上を目的として各種取組みを推進する。本 WG は RING 活動の中核を担う活動であり、「地域課題解決」「地域支援モデル構築等」を継続的に進める。

特に今年度は、TOP コーディネータのノウハウを、全国各地域へ広く展開されることを目指して活動を行う。

### 【今年度の取組み案】

- 会員サイトに問い合わせフォームを設置し、常時間問い合わせを受け付ける（5月8日開設済）
- 機械振興協会等の協力機関による支援を含め、好事例を共有するコーディネータ会議の開催を継続（5月18日、9月14日、2月開催予定）
- 専門家リストの更新および地域支援機関への専門家紹介（専門家新規登録再開済・専門家紹介開始済）
- TOP コーディネータのノウハウを全国各地域へ広く展開する。
  - 滋賀県産業技術センター／ものづくりテラス林氏との連携（RING 主体）
  - 群馬県産業技術センターとの連携（機械振興協会主体）

## 2) ロボット導入支援人材育成ワーキング活動(新 WG2)

### 【リーダー】

一般社団法人 日本ロボットシステムインテグレータ協会

### 【取組み趣旨】

昨年度の活動を通じて、各地域に密着し、ロボット導入を丁寧に伴走支援できる専門人材の重要性が改めて明確となった。これを踏まえ、本 WG では活動を継続・発展させ、自動化コーディネータ人材の育成を一層強化する。

また、より幅広い人材が自動化コーディネータを目指せる仕組みを構築するため、登録制度については、登録することのメリットも含めて検討を継続する。さらに、AI ロボティクス時代に必要となるコーディネータの知識・スキルを見据えつつ、中小製造業の現場に実装可能な人材の育成に着手する。

### 【今年度の取組み案】

- 前年度に引き続き、経済産業省研修所(東京都東村山市)において宿泊型研修を1月に実施
  - 研修内容の充実を目的として、以下の実現可能性を検討する
    - フィジカル AI 等の最先端技術を学べる講演
    - ロボット導入に関する現場視察
- より多くの方に受講してもらうため、各地域で1日研修の開催を計画
  - 7~8月に九州地域での開催を第一弾として検討中

### 3)企業×地域連携促進ワーキング活動(新 WG3)

#### 【取組み趣旨】

- 各地域が抱える課題の把握×企業が有するソリューションの可視化を進めると共に、地域が共通的に抱える課題(ニーズ)を集約し、企業が持つロボット技術・自動化ソリューション(シーズ)を組み合わせた解決策の検討・提言を行う。これにより、ロボット導入等の生産性向上を目指す地域(自治体、支援機関、地域企業)が、ニーズに合致したソリューションを選択・導入しやすい環境づくりを推進する。
- 上記実現に向け、会員間(企業×地域、業種が異なる企業間、Sler×地域コーディネータ等)の連携機会の促進を図り、産業用ロボットのみならず、サービスロボット領域含め、AI や DX 等の新技術も駆使して効果的な解決策(新たな価値提言)を目指す。

#### 【今年度の取組み案】

取組みの具体化および着実な推進に向け、株式会社デンソーをWG3リーダとして、様々な業種の企業会員、地域の正会員・準備会員、専門機関等が連携したチームを組み、以下テーマを推進する。6月定期総会にて活動計画を発表し、メンバーの募集を行い、WG活動を始動する。

- 地域企業の自動化ニーズ可視化:地域別の自動化課題マップの調査・作成
- 企業会員のソリューション棚卸し:企業が地域へ提案したい商材・サービスの可視化  
→「ソリューションカタログ」として地域企業が選びやすい提案素材を整備・公開
- 地域が抱える課題やニーズと企業が有するソリューションや技術のマッチングを促進する場を整備
- 共同実証テーマ創出(可視化→実証→社会実装):地域企業でのPoC、必要技術の企業マッチング

### 4)ロボット導入支援の高度化ワーキング活動(新 WG4)

#### 【取組み趣旨】

地域の中小企業等で自動化やロボット導入が進まない要因となっている導入前後のプロセスを高度化・標準化し、「生産性向上、省人化、品質安定化のための支援強化策」の構築を目指す。

本WGでは個社では解決が難しい業界全体の課題に取り組むべく、様々な業種の企業会員、地域の正会員・準備会員、専門機関等が連携してチームを組み、導入前の地ならし段階、および導入後の運用段階における有効な打ち手を策定し推進する。

#### 【今年度の取組み案】

取組みの具体化および着実な推進に向け、企業会員 または、専門機関からWG4リーダを選任し、取組み内容の具体化およびチームアップを推進する。

本WGの始動(活動計画策定およびメンバー募集)は定期総会以降で具体化を図り、改めて発表する。

- 導入前(地ならし段階)の高度化:適性診断や品質安定化のための施策・ツールの標準化
- 導入後の運用高度化:遠隔監視や稼働データ収集の可視化・IoT化等の標準化を検討
- 中小企業の導入促進に繋がる支援制度の高度化(補助金との結びつけ等)の検討・提言案の作成

#### 5)ロボット利活用の掘り起し・普及促進ワーキング活動(新WG5)

##### 【取組み趣旨】

地域企業のロボット導入等の生産性向上の機運醸成、およびロボット利活用を促進する文化・土壌づくりを目的として、昨年度の「セミナー・ワークショップWG」で検討を進めてきた企画をベースに、企業会員や専門家(アドバイザー)も新たに加え、実効性の高い機運醸成・普及促進策を推進する。

ロボット導入含む自動化の経験が無い(又は少ない)企業を対象とし、潜在的に問題は感じているが契機がつかめない企業の背中を押すための効果的な施策を、各地域(自治体、支援機関)と密に連携し、推進する。

- 地域企業が抱く導入の誤解・不安(コスト、難易度、運用負荷)を解消する機運醸成策を推進すると共に、ロボット導入の“リアルな価値”を啓発。
- 地域企業がロボットを理解・導入・使いこなすまでの「行動変容を促す仕組み」を検討。
- 地域全体でロボット利活用を進める文化・土壌づくり。

##### 【今年度の取組み案】

取組みの具体化および着実な推進に向け、戸田建設株式会社をWG5リーダとし、加えて昨年度のセミナー・ワークショップWGリーダの永井様をアドバイザーとして、様々な業種の企業会員、地域の正会員・準備会員、地域の金融機関、専門機関等が連携したチームを組み、以下テーマを推進する。

6月定期総会にて活動計画を発表し、メンバーの募集を行い、WG活動を始動する。

- 地域会員(自治体、支援機関、地域企業)とタイアップしたセミナー、体験ワークショップ開催
- ロボット体験会・デモイベント:企業会員の技術紹介、導入企業の体験会などの企画・開催

- 地域メディア・自治体と連携した機運醸成策の調査・企画  
→ 地域イベント(産業フェア等)を活用し、地域全体でロボット利活用を促進する機運醸成施策等を調査・検討する。

#### 6)NEDO 懸賞金活用型プログラム/地域の人手不足解消に資するロボット技術の開発

【事業者】三菱総合研究所

【取組み趣旨】

3ヶ年活動の2年目として、本年度は2つのコンテストを実施する。

現場の実状に合った課題設定に対して、地域の中小企業に適用可能なアウトプットとなるようRINGとして引き続き連携を行う。なお、コンテスト(A1)は、来年度開催予定の実機競技コンテスト(A2)に繋げる。

【今年度の取組み案】

- コンテストA:自動車製造業検査工程を対象としたロボット技術開発のピッチコンテスト(A1)
- コンテストB:製造業に導入可能なロボット技術をピッチコンテストで広く募集・一覧化

#### 9.3 新規会員の継続募集について

- 本会取組みを全国の地域へ拡大するため、自治体および地域支援機関に対し、継続的にRINGプロジェクトを周知し、新規会員の参画を募ることで活動の幅を広げていく予定である。
- また、企業会員においても、本会の発展的かつ継続的な取組みを目指し、本会趣旨に賛同するロボット関連企業を対象に、継続的な参加を募っていく。

#### 9.4 今年度の主なスケジュールについて(予定)

【主な会議体】

幹事会	2026年5月18日
定期総会	2026年6月15日
全体会合	2026年8月19日、11月19日、2027年2月25日
WGリーダ会議	2026年8月～(毎月定期開催)
コーディネータ会議	2026年5月18日、9月14日

【RoboNext(ロボット展示会)でのRINGステージイベント】

- 日時:2026年12月2日(水) ※ 時間帯など詳細別途
- 場所:インテックス大阪(RoboNext内 <https://robonext.nikkan.co.jp/>)
- 形式:対面でのステージイベント

- 目的:RING プロジェクトの意義や取組内容等について、全国の関係者に広く発信する
- 内容:講演、展示、記念撮影など(今後 詳細検討)

#### 9.5 その他

##### 【RING 会員向けサイト】

- RING サイトを5月8日にグランドオープンし、昨年度の成果共有および今年度の情報発信を行う。一般向けサイトを含め、サイトデザインや内容の充実については、会員の意見も聞きながら、独自サイト化も含め取組み方針を議論する。

以上